

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（本文の表記の一部を変えています。）

突然^{とつぜん}ですが、自分の好きな「本」を思い浮かべてみてください。まず思い起こすのはどんなことでしょうか。もしかすると本の内容より先に、その装丁^{そうてい}や書体、紙の手触り^{てざわ}やページをめくる音など、感覚的な記憶^{きおく}がよみがえってくるかもしれません。コンテンツ（情報）としての「本」でなく、モノとしての「本」は、いろんな大きさの判型^{はんがた}が決められ、紙に印刷され、製本され、カバーがかぶせられ、梱包^{こんぱう}されて、取次店から書店の棚^{たな}に①ナラび、私たちはそれを手に取ることができます。

アメリカの月刊誌『ライフ』は、一九九八年に過去二〇〇〇年の最も重要な出来事と人物のそれぞれの一〇〇選ランキングを発表しました。その結果、最も重要な出来事の第一位に選ばれたのは、グーテンベルクの活版による聖書の印刷でした。印刷術の発明は、聖書の普及^{ふきゅう}によつて宗教改革を刺激^{しげき}し、特定階級のものであつた読み書き能力を②タイシユウレベルに広げ、人類の③の先駆^{せんく}となりましたとしています。

もちろん現代の私たちも、④その恩恵^{おんけい}を受けています。そして、この本づくりの世界でも、技術は日々進化します。印刷業界では、おおよそ五〇年の間に大きな技術革新が二回起こりました。一度目は、⑤から^注電算写植へ、二度目は、電算写植から

⑥へ。二十一世紀に入り、本づくりは曲がり角を迎え^{むか}ました。

明治時代に⑦ソウギョウした老舗^{らいせ}の製本会社であり、「広辞苑」や「六法全書」の製本も手がける牧製本の佐々木^{ささき}さんは、製本の職人仕事を受け継い^つでくれる若い人がいない、と話しています。機械製本の時代になっても、本づくりを熟知した職人さんがいなければ製本業は成り立ちません。佐々木さんは、こうした技術の担い手^{にな}がいなくなるといふ事態によつて製本業が続けられなくなる日が来るかもしれない、という心配をしているのです。

そればかりではなく、人類が知識や情報を得るということにおいて、ずっと⑧その王座にあった本には、強力なライバルが現れました。パーソナルコンピュータや携帯電話をはじめとするIT機器です。現在多くの人々がこれらの新しい道具によって、毎日の生活や仕事に利用できる便利な情報を得ています。

電子ブックの開発も最近になって、再び活気を帯びてきました。一九八〇年代から開発が進められ、いくつかの製品も世に送り出された電子ブックは、初めの二十年間はあまり社会に浸透しませんでした。しかしアメリカで研究されてきたEペーパーという技術は、液晶画面のように光を発するのではなく、紙に印刷された文字と同じように⑨反射式で人間の目に入ってくることから、これまでの壁を破る製品として期待されています。

新しい技術と、本づくりを取り巻く環境の変化は、果たして本の未来はどうなるのだろうか、という不安と期待を生み出しています。最後にこの点について、印刷⑩ハクブツカンの栗津潔さんの言葉を紹介します。

「私は今のところ⑪」というふう考えたことはありません。それは本が、紙やインキや布や革や糊⑪といったようなマテリアル（モノ＝物質）だからです。このマテリアルの力は、非常に大きいものです。

デジタル機器が非常に発達して便利な知識をいち早く流したり、あるいは文学や絵画のような芸術作品まで提供したとしても、それはあくまで情報の範囲⑫を出していません。マテリアルを伴わない情報だけでは、人間は決してそれを全面的には⑫シジしないでしょう。⑬自分の好きな本をいつも鞆⑬に入れていたり、手にとつて眺めたり触ったりすることは、人間にとつてとても大切なことです。形のない本の中身だけが、重要ではないのです。

コンピュータがつくり出すさまざまなイメージに、私たちは驚かされます。これが古いものにとつて代わるのだ、と煽られたりもします。でも少なくとも本や絵画などを見る限り、現在のところ紙の上にインキや絵の具で表現されたものの方が、圧倒的にオリジナルな力を発しています。先入観を捨てて素直な心で見れば、それは誰にでも分かることです。むしろ若い人たちが、そう感じているのではないのでしょうか。

⑭私は、人類の進歩や科学技術の発展を疑うわけではありません。今後デジタルの世界から、優れたものが生まれてくる

かもしれません。⑮ そうであっても人類は必ず、情報だけでなくマテリアルによってバランスをとるはずで
ともに活かすということです。人類の智慧は⑯ そのようにして進むものだ、私は信じています」

(『本の未来』2003 福井信彦^{ふくいのぶひこ})

注 電算写植・・・「写植」(写真植字)とは、金属製の活字を用いず、写真の原理を使って文字をフィルムに焼き付けるこ
と。この写植を、電算機(コンピュータ)で行えるようにしたもの。

問一 ― 部①・②・⑦・⑩・⑫のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 □部③に当てはまる言葉を、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日進月歩 イ 情報革命 ウ 宗教論争 エ 温故知新

問三 ― 部④「その恩恵」とありますが、どのようなことの「恩恵」ですか。文中から六字でぬき出しなさい。
(句読点は字数に入れます。)

問四 (1) □部⑤・⑥に当てはまる言葉を、次のア・イからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア DTP (デスクトップパブリッシング。パソコンを使って印刷物のデザインやレイアウトを作成、編集し、プリン
ターで出力する。)

イ 活版印刷(凸版^{とつばん}という板を用いて、文字を紙に転写する印刷方法。金属製の活字のパーツを組み合わせ、糸で全体
をしばって固定し、凸版を作る。インクをぬって、紙に押し当てて転写する。)

- (2) 次の文章の場面は、ア D T P イ 活版印刷 の、どの作業に当たりますか。最も適当なものを、ア・イから選び、記号で答えなさい。

ジョバンニはすぐ入り口から三番目の高い卓子テーブルに座った人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、「これだけ拾って行けるかね。」と言いながら、一枚の紙切れを渡わたしました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい箱をとりだして向うの電灯のたくさんついた、たてかけてある壁かべの隅すみの所へしやがみ込むと、小さなピンセットでまるで粟粒あわぶぐらいの活字を次から次と拾い始めました。

『銀河鉄道の夜』 宮沢賢治

- (3) 印刷技術が発明される前には、「聖書」はどのような方法で人々に伝えられていたでしょうか。考えて書きなさい。

問五 — 部⑧「その王座にあった本」とありますが、どのような意味ですか。「二番」という言葉を必ず入れて、文中の言葉を使って三十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問六

——部⑨「反射式」とありますが、「反射光」・「透過光」^{とうかこう}について次のような意見もあります。次の文章を参考にして、「反射光」の方が、より適当であると思われるものを、あとのア～エのうちから二つ選び、記号で答えなさい。

紙に印刷された文書のほうが、パソコン画面よりも、原稿^{げんこう}のミス、間違いを見つけやすい理由として、「反射光」と「透過光」の性質^{せいかく}の違いが指摘^{ししてき}される。前者は本を読むとき、いったん紙に反射してから目に入る光。後者はパソコンやテレビ画面を見るとき、直接目に入る光である。

紙に印刷して読むとき、すなわち反射光で文字を読む際には、人間の脳は「分析^{ぶんせき}モード」に切り替わる。目に入る情報を一つひとつ集中してチェックできるため、間違いを発見しやすくなるのだ。

これに対して、画面から発せられる透過光を見る際、脳は「パターン認識^{はあく}モード」になる。送られてくる映像情報などをそのまま受け止めるため、脳は細かい部分を多少無視しながら、全体を把握^{はあく}しようとする。細部にあまり注意を向けられないので、間違いがあっても見逃^{みのが}してしまう確率が高くなる。

『紙に印刷すると間違いに気づく?』^{かわつちやすたか} 河内康高

ア 提出しようと思うレポートの漢字が、正しいかどうかたしかめる。

イ 前に実物を見たことのある絵が、どんな構図^{こうず}だったか思い出す。

ウ 最新のニュースにどのようなものがあるか、見出しだけ流し読みする。

エ 他の人の書いた意見文に、不自然な表現がないかチェックする。

問七

部⑪に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 印刷された本がなくなるとか、非常に少なくなる

イ 印刷された本が、百年後までもずつと残っていく

ウ 印刷された本は、電子ブックよりもすぐれている

エ 電子ブックが、印刷された本よりも活用されていく

オ 電子ブックが、さらにめざましい発達をとげていく

問八

部⑬は、どのようなことの具体例ですか。文中の言葉を使って二十字以内で答えなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問九

部⑭～⑯に入る適当な語を、次のア～オのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ でも ウ つまり エ もちろん オ なぜなら

問十

部⑰「そのようにして進むものだ」とありますが、筆者はここで、人類はどのように進歩していくと考えていますか。

文中の言葉を使って書きなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記を一部変えています。)

二度目の目覚めは、もう昼の日差しがワンルームの真ん中まで差し込んでいた頃だった。こうなるとよく寝てすっきり、ではない。寝過ぎて頭が重い。もやもやした気分のまま、すっかりアラームの仕事を放棄したスマホをたぐり寄せ、横になったまま片手で操作し、SNSのアプリを開いた。

おすすめの画面に、同じタイプの投稿ばかりが表示される。見る人の傾向に合わせて好みのページを上位にならべる機能があるようだ。その庄に蹴倒されそうになりながらもいくつかの写真をタップする。

今日も「ていねいな暮らし」の住人は、早朝から白湯を飲み瞑想をし、手の込んだ料理を作っている。見たくもないのに、反射的に指が動く。それでいて楽しい気分になるのではなく、駄目な自分に落ち込む。そのループから抜け出せない。可絵のモーニングルーティンはもう白湯や瞑想じゃない。

①——これじゃあまるでスマホ中毒だ。

心の中で自分を嘲笑った。

起床が遅れたせいで、一日の残りがわずかになってしまった。翻訳した本が完成したと連絡を受けていた。②ユウソウしてもらわずに、編集部まで取りに行こうと思ったのは、あのカフェを思い出したからだ。もともと今日は坂下さんの出社日ではない。編集部の若い男性から本を受け取ると、足早に③路地に向かった。

路地の入り口にはこの間と同じように、小さな④カンバンが立っていた。でも何かが違う。違和感を抱きながら近づくと、
〈免疫力を上げるコーヒーあります〉

とあった手書きのカードに、⑤ツイカで何かが書かれている。よく見ると、〈免疫〉の字が×で消され、その上に小さく〈自己肯定〉と記されていた。

「自己肯定力を上げるコーヒー……」

可絵はその場でぼんやりと立ちすくんだ。

〈可絵はカフェに入り、そろりと名乗る店主に表に書いてあったメニューを注文する。〉

「スプーン山盛り二杯^{はい}」

とつぶやきながら、そろりさんがすつと背筋をのぼす。何かの儀式^{ぎしき}をするかのように、緑のコーヒー缶^{かん}から、粉状に挽いた豆をすくって、ケトルに入れていく。

「え、フィルターを使わずに、豆を直^{じか}に入れるんですか？」

可絵がおどろいて尋ねると、

「はい」

そう真剣な顔^{しんけん}でうなずいて、再びふたをした。

「これで豆が沈^{しず}むまで待つんです」

やがてケトルからコーヒーのいい香りが漂^{たなよ}ってきたかと思うと、可絵の前に空のカップが置かれ、ケトルがすつと寄せられた。

「自己肯定力を上げるやかんコーヒーです。そおーつと⑥注いでお飲みください」

「やかんコーヒー？」

「お湯をわかったケトルに挽いた豆を入れて、そのまま置いておくと注1抽出されるんです」

「⑦たったそれだけ？」

拍子^{ひょうしぬ}抜けして聞くと、

「はい。それだけです」

と、さも当たり前、という風に答える。

ケトルからカップにゆつくりと注ぐ。少し濁^{にご}ってどろりとした重みのあるコーヒーだ。一口飲んでみると、深いこくの中に、苦みだけでない複雑な味わいを感じた。

ふと手元が明るくなつて、はつと顔を上げると、いつの間にかテーブルにキャンドルが灯^{とも}されていた。キャンドルホルダーには、この間と同じくジャムの空きびんが使われている。

「このコーヒー、美味^{おい}しいですね。飲んだことのない珍^{めず}らしい味がします」

可絵はケトルのコーヒーをカップに足す。

「ケトルの底に粉がたまっていて、それが注^つぎ雑味になるので、最後まで注ぎきらないほうが……」
時^{とき}すでに遅し。可絵のカップには残りのコーヒーが全て注ぎきられてしまっていた。

「すみません。説明が遅くなつてしまつて」

そろりさんは一瞬^{いつしゆん}、肩^{かた}をすぼませるが、

「でも、それはそれで美味しいですよ」

そういったきり背中を向けて、シンクで洗い物をはじめた。

確かに舌触^{したざわ}りはざらつとする。でもどつしりとした強さは、体験したことのない味わいだ。コーヒー豆の全てを余すところなく口^{くち}にしているようで、野性的な魅力^{みんりょく}を感じる。

——やかんコーヒーつていつていたつけ。

すぐに検索^{けんさく}してみようとバッグの中のスマホにのぼしかけて手を止めた。⑧ 別にいまそれを知る必要もない。それにどのみちここでは電波が入らないんだ。

「雑味か……」

口からこぼれ落ちた。

可絵は自分に問いかける。何のためにSNSを見るのか。情報を得るため？ それなら必要なことだけ調べればいい。にもかかわらず、一日二、三時間は当たり前、気づけば五時間以上もぼんやりとスマホばかり見ていることもある。起きている時間の大半をそんなことに費やしている。何のために？ sayoさんの暮らしをのぞくため？ 会ったこともなく顔すら知らない人の生活を知ってどうするのか。そもそも「ていねいな暮らし」ってどういうことなのか……。

ケトルの底にたまったどろりとしたコーヒー豆が刺激になったのか、次から次へと自分への疑問がわいてくる。

「ていねいな暮らし」の住人たちは、まだ家族が起きてこない早朝や一日の終わりに、自分のためだけにていねいにコーヒーをいれるのが豊かな時間だ、とそろって口にする。インスタントコーヒーをいれるのですら面倒だと思いう可絵は、やはり駄目な人間なんじゃないか、と落ち込んだこともあったが、それは本当に情けないことなのか。鉄のフライパンで上手に餃子が焼けないことが果たして恥ずかしいことなのか。

「私、誰かがいう^{注3} おしきせの素敵^{すてき}に押しつぶされそうになっていたんです。そうじゃなきゃ駄目だ、って自分を追いつめて」SNSに縛られていた日々のことを可絵は打ち明ける。

「ぼくは思うんですけれど」

静かに聞いていたそろりさんが、おもむろに口を開いた。

「自分を取り繕^{つくろ}ったり自慢^{じまん}をするのってパワーがいるんですよ。だからSNSなんかでそのパワーを真つ正面から受け止め続けるのってけっこうつかれるんじゃないかな、って。^⑨よそ見しているぐらいがちょうどいいんですよ。ほら、リスみたいにね」

マスクのせいでもっているのか、低く静かな声が可絵を安心させる。

「リス？」

「そう。リスって、冬の間は巣穴の中にこもって過^{すご}すんです。秋の間に食料を集めておいて、自分はふかふかの冬毛になって。そうやって冬をうまいことやり過^{すご}すのです」

両方の頬^{ほお}にいっぱい木の実を詰め込んで巣穴に運ぶリスの姿を想像していたら、気持ちまであたたかくなってきた。

「やり過ぎ……」

毎日を快適にしたいと思ったはずなのに、^⑩気づけば「ねばならない」にがんじがらめになっていた。

黙り込んだ可絵を見守っていたそろりさんが、キッチンを引き出しをガタゴトあけた。何かを探しているようだ。しばらくして、ちびた一本の鉛筆が可絵に差し出された。

「これを」

^{わた}渡されるままに手に持つと、

「芯を持つ、です」

とこの上なく自信を持った口調でいう。

「え？」

可絵がとまどっている、

「あなたに必要なのはこれです。自分自身の芯を持つことです」

「^⑪あ、駄洒落？」

^ふ吹き出してしまった。が、そろりさんはいたって真面目だ。それからまたゴトゴトやっていたかと思うと、今度は使い古された鉛筆けずりを差し出してきた。三センチ四方ほどのプラスチック製の箱に金具のついたなつかしいタイプのものだ。

「^⑫芯を研ぐ。研ぎ澄ます、です」

これならどうだ、といわんばかりの表情だ。

「他人の基準に振り回されて自分を見失ってはもったいないです。自分がいいと思えばいい。ただ、そのためには自分の研ぎ澄まされた芯を持つことが大切なんです」

「芯……」

両手に持った鉛筆と鉛筆けずりに目を落としていると、そろりさんがキッチンから出てくる。

「よかったらそれ、お持ち帰りください」

にこやかにいわれたが、鉛筆なら家にもたくさんある。やんわりと断る。

「そうですか」

残念そうに肩を落としたそろりさんが、はたと顔を上げ、

「ところでアメリカ人ってうすいコーヒーが好きなんだと思います？」

といきなり妙なことを尋ねてきた。

「さあ」

と首を傾げた。^{かし}きつとインターネットに答えはあるだろう。^⑬でもいまはそれよりも、と、可絵はとんがった鉛筆を想像しながら右手をぎゅつと握りしめた。^{にぎ}

『今宵も喫茶ドードーのキッチンで。』^{こよい きつた}標野^{しめの なぎ}凧

注1 抽出・・・ここではコーヒー豆からお湯を使ってその成分を溶かし出すこと。^と

注2 雑味・・・本来の美味しさを損なう味。^{そじ}

注3 おしきせ・・・一方的に推されたもの。^お

問一 ―部①―「これじゃあまるでスマホ中毒だ」とありますが、このときの可絵の気持ちを説明したものとして最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 毎晩遅くまでSNSを見ていて、昼まで寝てしまう自分にうんざりする気持ち。

イ 朝起きてすぐに、SNSの投稿を見ないと気が済まない自分を恥^はずかしく思う気持ち。

ウ SNSで人と比べて自分が駄目だと思い、落ち込み続ける自分を不安に思う気持ち。

エ 何も考えず、無意識にSNSのアプリを開いて見てしまう自分にあきれる気持ち。

オ SNSで見る「ていねいな暮らし」にあこがれ、自分も見習わねばとあせる気持ち。

問二 ―部②・③・④・⑤・⑥のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問三 ―部⑦「たったそれだけ？」とありますが、可絵はなぜそのように言ったと考えられますか。その理由を説明した次の文の□部A・Bに当てはまる言葉を、それぞれ五字以内で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

自己肯定力を上げるといふコーヒーを、そろりさんがケトルで□A作ってしまったことに□Bから。

問四 ―部⑧「別にいまそれを知る必要もない」とありますが、このときの可絵の気持ちを説明した次の文の□部A・Bに当てはまる言葉を、それぞれ指定した字数で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

□A（五字以内）の世界ではなく、目の前の□B（二字）の世界を大切にしたいと思う気持ち。

問五 ―部⑨「よそ見しているぐらいがちょうどいいんですよ。ほら、リスみたいにね」とありますが、ここでそろりさんは可絵にどのようなことを伝えたかったのですか。五十五字程度で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

問六 — 部⑩「気づけば『ねばならない』にがんじがらめになっていた」とありますが、「ねばならない」とはここではどのような考え方ですか。四十字程度で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

問七 — 部⑪「あ、駄洒落？」とありますが、可絵は何と何をかけた駄洒落だと思ったのですか。解答らんに合うように書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

問八 — 部⑫「芯を研ぐ。研ぎ澄ます、です」／これならどうだ、といわんばかりの表情だ」とありますが、

(1) 「芯を研ぐ。研ぎ澄ます」とはどうすることですか。三十字程度で説明しなさい。（句読点は字数に入れます。）

(2) 「これならどうだ、といわんばかりの表情だ」からそりさんのどのような様子がわかりますか。三十字程度で書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

問九 — 部⑬「でもいまはそれよりも、と、可絵はとんがった鉛筆を想像しながら右手をぎゅっと握りしめた」とありますが、このときの可絵の思いを書きなさい。

問十 「自己肯定力を上げるコーヒー」によって、可絵はどう変わったと考えられますか。可絵の変化を説明したものとして **適当**でないものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア SNSを見て面倒くさがりで不器用な自分を駄目な人間だと責めていたが、本当にそう言えるのか考えるようになった。
イ わからないことはスマホで何でも調べていたが、ネットに書かれている答えが必ず正しいのか考えるようになった。

ウ 「ていねいな暮らし」を送ることにこだわり続けていたが、それは自分に合う暮らしなのかどうか考えるようになった。

エ SNSを見るのについて時間をかけがちであったが、自分にとってSNSとはどのような存在なのか考えるようになった。
オ 生活で手間をかけないことに後ろめたさを感じていたが、手間を省くことで生まれる良さもあると考えるようになった。